

國學院大學學術情報リポジトリ

大阪府立今宮中学校『校友会報』第六号（大正元年八月）について：

中学校教員時代の折口信夫をめぐる新資料の発見

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學 公開日: 2024-05-21 キーワード (Ja): 大阪府立今宮中学校, 『校友会報』第六号, 折口信夫, 校友会文芸部, 談話会 キーワード (En): 作成者: 倉橋, 真司, Kurahashi, Shinji メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000391

大阪府立今宮中学校『校友会報』第六号(大正元年八月)について

— 中学校教員時代の折口信夫をめぐる新資料の発見 —

倉橋真司

序

筆者は近年、旧制中等諸学校の『校友会誌』(『校友会誌』)を資料として、明治・大正期の学校文化を復元する研究に取り組んでいる。令和四年七月、大阪府立今宮中学校の明治四十四年度『校友会報』第六号に接する機会を得た。本号は、同年に嘱託教員として同校に着任したばかりの折口信夫に関する記事

や、関係教員・生徒の記事が豊富であり、これらの方面における今後の研究に益するものと考えられる。本稿は所蔵者の許可を得て、主な内容の紹介をするとともに若干の考察を加えたものである。ぜひ多くの方々に御教示を賜りたい。

なお、本文中の引用資料における旧字体・異体字等は、常用漢字や正字に改めた。

一 大阪府立今宮中学校と折口信夫

大阪府立今宮中学校は、明治三十九年（一九〇六）に大阪府における十番目の府立中学校として創立され、昭和二十三年（一九四八）の学制改革により新制の大阪府立今宮高等学校となった。学校史の編纂も『今宮中学校創立三十年史』¹を始めとして豊富であり、大阪府師範学校長から初代校長に就任した瀬川彦四郎によって、校訓「誠実剛毅」に基づいた人格形成と、学力養成を重視した独自の教育課程が編制され、大正から昭和前期において旧制高等学校などの上級学校に多数の進学者を輩出していたことが知られる。²

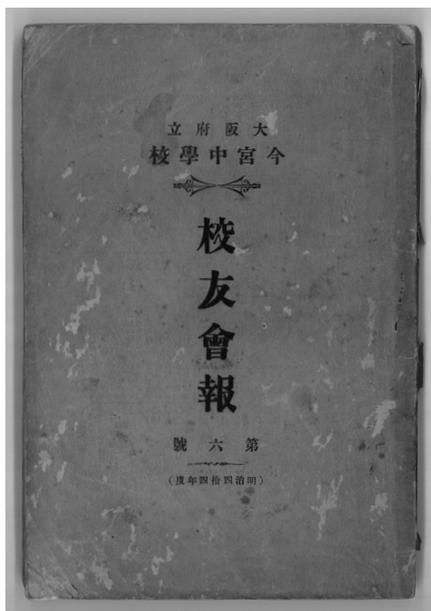
折口信夫（一八八七年生—一九五三年没 国文学者・民俗学者・歌人）は、明治四十四年（一九一一）十一月に今宮中学校の嘱託教員となり、大正三年（一九一四）三月に退職するまで、第四期生の国語科と学級担任、第五期生の国語科を担当した。この中学校教員時代が後に発表される折口の学問や短歌、人生に多大な影響を与えたことは周知のことである。特に伊勢清志、鈴木金太郎らの教え子との関わりについては、折口の人物論における不可欠な論点であるといってもよい。³

これまで中学校教員時代の折口を語るとき、根拠とされてきたのは折口自身による「書簡」、「日記」、「自撰年譜」及び「年譜」、教え子たちによる回想⁵が主なものであった。二十代の青年教師であった折口が、教育にかけた情熱と教え子に向けた愛情はとても深いものであり、その姿は退職上京後の本郷昌平館での共同生活に継承されることになった。これらの通説的な理解については、私自身も疑問の余地はない。

では、学校という組織において、折口はどのような役割を担っていたのだろうか。その斬新な授業内容等は、教え子の回想によって知ることができるが、当時の折口や生徒たちがどのような学校文化の中で過ごしていたのかは、これまで焦点を当てられることはなかったと思われる。今回紹介する『校友会報』（第六号）は当時の校内記録として、これまでの理解の隙間を埋めるような新たな事実を提示してくれることと思う。

二 『校友会報』第六号の概要と校友会組織

大阪府立今宮中学校『校友会報』第六号⁶は、縦22センチ×横15センチ×厚さ9ミリで、総頁数は二〇頁である。発行年月日は大正元年八月二十五日、編輯兼発行人は、大阪市南区恵美須



図版1 『校友会報』第六号(個人蔵)

町の小西伊三郎、印刷人は大阪市東区高麗橋の木水奥兵衛、印刷所は大阪市東区高麗橋の共益社本店、発行所は大阪市南区宮津町の大阪府立今宮中学校々友会となっている。

口絵写真が二枚あり、「明治四十四年度職員」^⑦、「大阪府立今宮中学校生徒作業」のキャプションが付けられている。表紙の裏面に目次があり、次の項が掲げられている。「第二回卒業式に於ける校長の告辞」^⑧、「本校の歴史第六年」^⑨、※「第一学期」^⑩、

※「春季修学旅行記」^⑪、※「丹波但馬地方旅行記」^⑫、※「春季修学旅行記」^⑬、※「第二学期」^⑭、※「弔悼会」^⑮、※「第三学期」^⑯、「告辞及び祝辞」^⑰、「職員異動及生徒異動」^⑱、「本会記事」^⑲、※「文芸記事」^⑳、「談話会」^㉑、「揭示」^㉒、「会報」^㉓、「柔道部」^㉔、「剣道部」^㉕、「庭球部」^㉖、「野球部」^㉗、「遊戯部」^㉘、「運動会」^㉙、「庶務部」^㉚、「共同購買部」^㉛、「作業」^㉜、「消息」^㉝、「会員住所及姓名」^㉞、「雑纂」^㉟、「校友会々則及細則」である。執筆は教職員が分担しているが、※を付した項には、学校日誌に続いて各学年の代表生徒の作文が掲載されている。

やや雑然とした感があるが、構成としては五部に分かれ、部の区切りごとに赤い用紙が挿入されている。口絵に続いて、巻頭(p.1~4)に、「第二回卒業式に於ける校長の告辞」^⑧、第一部「本校ノ歴史」(p.5~80)に、一学期(四月~八月)、二期(九月~十二月)、三学期(一月~三月)の各学年学級の級長・副級長・列長の任命、春季と秋季の修学旅行等の主な学校行事の記録、学年末の学事報告と卒業式の記事、第二部「本会記事」(p.81~160)に、校友会における各部の記録、第三部「会員住所及氏名」(p.161~168)に、校友会員である教職員と生徒、卒業生の住所氏名の一覧、第四部「雑纂」(p.169~182)に、各学年教科での使用教科書一覧、授業時程、生活指導上の家庭

への注意、第五部 (p.189~191)「校外会員諸君に告ぐ」に、「大阪府立今宮中学校々友会規則」をそれぞれ掲載している。大正期の『学友会誌』(『校友会誌』)としては、他校と比較しても、とても充実した内容となっている。「会報」の項に「会報発行の主旨を摘録して新会員の為めに告ぐ」として次のような記述がある。¹⁰⁾

「会報発行の目的は学校事業と表裏、相俟ちて発展進歩せし校友会の事業を中心とし、傍学校事業中の必要なる記録の一斑を叙し、かくて一年一冊、首尾五冊を通じて各員全五箇年間の一貫せる活動の歴史として、以て光彩ある学校生活に対し、他日追想の好資料たらしめんが為めなり。随つて本報は広く社会の公衆に示すべしにあらざして、当局会員たる生徒にして始めて見て以て感興すべき性質のものたり。而してこれが資料は皆実際の事件のみこれが記述は悉く具体的筆法のみ。本報発行は自己修養の歴史なり。本報の一頁は自己奮闘の記録なり。世間芸雑誌の如き浮華の文辞、我等に於て何かせん、将来業を卒へて学校を去る時に当つて各天涯に隔絶し、異境に四散せん時、鴻信を寄せて、互に一冊の紙面に相見え、以て相互に動静を報じ、母校の運命を与り聞かざらば、会心の事は亦是本会報の特色して誇らんとする所なり、会員

諸子夫れこれを諒とせよ、」

創立後わずか五年にして、これほど明確な編集目標を示していることには驚かされる。瀬川校長の教育方針が反映されていると考えられる。

ここで今宮中学校の校友会組織について触れておきたい。旧制中等諸学校では学友会(校友会)とよばれる教職員と生徒による組織があり、部活動や学校行事を分掌していた。教職員が「理事」、生徒代表が「委員」を務めて、部員をまとめる形をとるのが一般的であるが、¹¹⁾明治四十四年度における今宮中学校



図版 2 口絵「明治四十四年度職員」

- 1列目右より2人目が瀬川彦四郎
- 2列目右端が石丸梧平
- 3列目右より2人目が折口信夫、3人目が山口勇次

の場合、校友会は教職員・卒業生・生徒によって構成され、教職員によって文芸部(会報・掲示・文庫・会合)、運動部(庭球・剣道・野球・柔道・運動遊戯)、庶務部、共同購買部の職務が分掌されていた。それぞれの主な職務内容については、文芸部は『校友会報』の編集や、時事・教養に関する事項の校内揭示の制作、購入図書管理、後述する談話会等の会合の企画運営、運動部は各部での他校との交流戦や校内の運動会の企画運営、庶務部は校友会の会計管理、共同購買部は校内での学用品等の販売の収益の管理であったことが分かる。

明治四十四年度において校友会が主催した学校行事は、○創立記念式(四月二十二日)、楠公精忠記念会兼談話会(五月二十五日)、○校外会員大会(七月最終の日曜日)、○弔魂式(秋季皇霊祭日)、○運動会(十月二十七日)、談話会(十一月十六日～十八日)、豊公入城記念会(十二月二日)、難波尊都記念会(二月十三日)、談話会(二月二十四日)、○卒業式(三月二十四日)であり、○を付した行事は校外会員(卒業生・中途退学者の有志)も参加することが認められていた。このほかの学校行事としては、春季修学旅行(五月一日～五日)、秋季修学旅行(十月二十一日)があるが、これは学年主催で実施された。

なお、今宮中学校の『校友会報』の所在について調査したと

ころ、後継校である今宮高等学校においては、バックナンバーの保管状況が確認できなかった。大阪市立図書館に、今宮中学校の『校友会誌』第二十六号(昭和三年七月)と第三十四号(昭和七年十二月)の二冊が所蔵されていることから、昭和三年以前に書名が変更になったことが分かる。この『校友会報』第六号は、これまでの折口信夫研究においても引用されていないことを考えると、新出である可能性が高い。『校友会報』は教職員と在校生、卒業生のみ頒布されたものであり、後述する折口の教え子たちは持っていたはずであるが、研究資料としては用いられることはなかったのである。

三 折口信夫に関する記事

『折口信夫全集』第三十一巻に所収されている「自撰年譜」明治四十四年には、「十一月、今宮中学の嘱託教員となる。三年級の国語・漢文と、学級訓育を担当。」とある。また、「年譜」の明治四十四年には、「十月、大阪府立今宮中学校の嘱託教員となり、当時三年級であった第四期生の国語科・漢文科と学級訓育とを担当する。その前年から同校教員となつてゐた石丸梧平(梅外)を知り、後年(大正三年二月)道頓堀の珈琲店パウ

リスタにおいて開かれた文芸同(同)会にも出席するやうになる。」とある。いずれも折口の今宮中学校での教員生活の始まりを示す記述であり、これらをもとに、明治四十三年七月に國學院大學を卒業後に帰阪し、一年余を経て奉職したと説明されてきた。しかし着任した月にずれがあり、その後の様々な年譜や教え子の回想においても、十月と十一月が混在している状態となっている⁽¹⁴⁾。また、なぜ年度途中で今宮中学校に着任することになったのかについては記載がないため、説明されることはほとんどなかった⁽¹⁵⁾。これらの問題は『校友会誌』第六号の次の記述より確定することができる。

〔第二学期〕の項のうち、「学校日誌」、傍線は筆者による。

「〇十一月二十一日 皇太子殿下午後四時三分梅田駅御通過につき本校職員の一部五四年生徒奉迎送をなす、本校教諭山上与平氏は千葉県佐原中学校へ転勤右後任として折口信夫氏来任

山上先生を送る

第三学年 伊勢 清志

この二三日、たゞならずあわたゞしく思ひたるものしるく、

わが山上先生は、雲もはるかなる東の空へと、今日うち出でたまひて明白⁽¹⁶⁾はやがていなむとのたまふ。

胸つぶるばかりうち驚きて、しばらくはものもいはれず。わがあたりなる友らはと見るに、いづれもひたあきれに、顔にはひとしく悲しげなる色の漂へるを見る。

先生もうれはしげに、しかも力強く読みあげたまへる韓信伝よ、故しらず胸ふさがり来て、まのあたりなる読本の行さへくらくなり行く。今日のわかれに、聞きたてまつる先生のみ声、おそらくはわが世のかぎりわずれじと思ふに、心いよく沈み来るをおぼえて、紛はさむと目をあくれば、先生の温容すこしうち曇りてむかひ立ちたまへる。霜月の風、がらす戸のひまより吹き入りて寒き教室に、あり聞えずもがまの鐘の聲響き渡る先生のみ教をうくる終はりの、今日の今の放課の鐘の声のあやにくやいと鋭く聞え来るなり。」

〔第三学期〕の項のうち、「一、四十四年度学事報告」の「職員異動」

「十一月二十日 山上教諭千葉県立佐原中学校教諭に転任せらる 折口信夫本校教授を嘱託せらる」

折口の着任は明治四十四年十一月二十一日であつた。前任の山上与平が千葉県立佐原中学校に転勤することになつたため、その後任として年度途中での着任となつたのである。山上は三年二組の学級担任と文芸部理事・会報係兼掲示係を務めており、折口は後任としてこれらの分掌を引き継いだことも別項における記事より確認できる⁽¹⁶⁾。山上は大阪府出身で國學院大學師範部国語漢文科を明治四十年に卒業(第十五期)した人物であり、岩橋小弥太と大学では同期であつた⁽¹⁷⁾。折口とも年齢が近く、直接の面識があつたのかも知れない。いずれにしても國學院が着任への縁をつないだ可能性が高い。送別文を学年代表として伊勢清志が書いていることも興味深い。『校友会誌』における生徒代表は、学期ごとに任命される各学年学級の級長、副級長、列長より選ばれていたことが窺えるが、明治四十四年度において伊勢は三学期に三年二組の列長を務め、また各学級より一名選出される文芸部補助係(三年二組)も務めていることから、あるいは後任の学級担任であり、かつ会報の編集担当であつた折口の勧めにより執筆したと考えられる。

この他に折口に関係する記事をここで二点紹介しておきたい。まず、「第三学期」の項にある、「一、四十四年度学事報告」の中に、明治四十五年三月二十四日に実施された、第二回卒業

式の記事があり、卒業生氏名の一覧が掲載されているが、その中に「折口和夫」、「折口親夫」の氏名がある。この二名は折口信夫の双子の弟である⁽¹⁸⁾。つまり、折口が明治四十四年十一月に着任した時、二名の弟が第五学年に在学中であつた。授業を受け持つことはなかつたと考えられるが、兄弟三名が教員と生徒という立場で、同じ中学校に通つた時期が四箇月ほどあつたことになる。

また、「会員住所及姓名」の項には明治四十五年度現在の職員、在籍生徒、卒業生住所氏名が記載されているが、職員の欄にある折口の住所は「東、南農人町一丁目古子方」であるのに対し、第二回卒業生の欄にある折口和夫、折口親夫の住所は、それぞれ「南、木津鷗、一・二・三」、「南、木津鷗一、一・二・三」となっている。この住所は明治四十四年度の情報を継承して掲載された可能性が高いことを考えると、折口は着任時より、弟たちが暮らす実家から離れて「古子方」に居住していたと考えられる。「古子」とは兄の古子進⁽¹⁹⁾を示し、「年譜」では大正二年九月より上京する同三年三月まで居住したと記されるが、実際はそれ以前より兄のもとにいたと見てよいだろう⁽²⁰⁾。なお、第二名の卒業後の進学先については記載されていない。

四 石丸梧平・第四期生・第五期生に関する記事

折口が今宮中学校教員時代に特に親交があった人物として石丸梧平⁽²⁾が挙げられるが、『校友会報』第六号によると、「第一期」の項のうち、「学校日誌」に「四月二十四日 朝礼の際北川教諭の送別式あり」、「五一⁽¹⁾日 朝礼の際、石丸教諭の新任披露あり。」と見えることから、石丸の着任は北川虎三郎の異動後の明治四十四年五月一日であったことが分かる⁽²⁾。前節で引用した「年譜」では、「(折口の) 前年より同校教員となつていた」とあるが、「前年」ではなく、「半年前」とすべきである。二人の出会いは今宮中学校であったと考えるのが自然であろう。石丸の明治四十四年度の校友会における分掌は、運動部理事庭球係、同四十五年度の処務分掌は、生徒監督教務係、作業施行係、受持学科は歴史と音楽であった⁽²⁾。

明治四十四年五月二十五日に文芸部の行事である「楠公精忠記念会兼談話会」が実施され、着任間もない石丸が「楠公の最後」という題で講演を行っている。その中で「何故に我校は楠公を慕ひて記念会を開くかの理由をのべんとす」として次のように述べている⁽²⁾。

「兎に角人の事業を成さんとするや、一意専心ならざるべからず。かのクリストが偉大なる人格を有するは何故ぞ、かれの宗教を開くや幾多、幾度の迫害はかれにせまりたり。この迫害やかれの試金石⁽³⁾にて最後の迫害やかれの生命を奪ひたり。かれ生命を失ひしも信念はのこれり正成の偉大なる信念は公をして湊川に戦死せしめたり。吾人は平常に歴史を学べり偉人の行はこれを範として行はざるべからず。正成の如きは実に世人に好模範を示すものなり本校の校訓なる誠実に全く一致せり。」

また折口の主な教え子たちについての記述もここで紹介しておきたい。まず折口が着任以来、大正三年三月まで学級担任と授業を担当した第四期生についてであるが、各学期の項における「学校日誌」の記述より、級長、副級長、列長の生徒名を知ることができる⁽²⁾。担任を引き継いだ三年一組の級長は江口芳輔、副級長は斧原雄三（いずれも通年）、列長は伊勢清志（三学期のみ）、三年一組の級長は上道清一、副級長は萩原雄祐、列長は鈴木金太郎（いずれも通年）が任命されている。また「第三学期」の項にある、「一、四十四年度学事報告」には、卒業式に際して各学年の優等褒状を受賞した生徒名が掲載されているが、第三学年（十五名）の中に江口芳輔、萩原雄祐、上道清一、

鈴木金太郎の名がある。江口、萩原は首席として特待生にも選ばれている。この他、「剣道部」の項には上道清一、斧原雄三が部員として活躍した記事があり、「遊戯部（陸上競技部）」の項では、伊勢清志が、十月十七日に天王寺中学校で開催された大阪府立中学校第十八回聯合運動会の「四百米突」で一等賞を獲得した記事が見える。

上道清一は、十月二十一日に実施された三学年の秋季修学旅行（山城嵐山・高雄方面）の旅行記を、生徒代表として執筆しているもので以下に一部引用してみた。

(二) 第三学年 上道 清一

尚進めば左に砥石を掘据せる所あり。平岡八幡は入らずして過ぎぬ。程なく一茶店あり道こ、より二手に分る。上は遊客の為に開きし新道にしてよく軍馬を通すべく下は旧道にして極めて峻峻なり。我等は喜びて旧路をとりや、行けば新道と合しぬ。こ、は梅ヶ畑村とて先に合ひし畑の畑は此辺の者なり。

いくつかの坂道を走り下つて遂に清滝の清流に到りぬ。未だ林間に（数文字脱力）を暖めて紅葉を焼くの季には至らぬ

ど想ひしよりは葉々霜に飽きて黄に紅に染め出され緑と相映じていと麗はしく流乱石に触れ更に流れて岸を嘔み泡沫雪を吐くところ白雪橋か、り風光早絶して無趣味なる我も一つ駄句にても作りたき思せり、橋の袖に独り先んじて渥丹の如くに紅葉せる楓一樹あり。楓一きは目立ちて美し。句

清滝や波に散りこむ青松葉

(後略)

『校友会報』第六号が発行された日（大正元年八月二十五日）、折口は第四期生の伊勢清志と上道清一の二名を連れた伊勢・志摩・熊野を巡る旅より帰阪した。この旅が後の折口の学問や短歌に大きな影響を与えたことはよく知られているが、なぜこの二名を同伴させたのかについては、折口自身が「心の美しい生徒」と称したこと以外に知るすべはない。今回紹介したこれらの記事より、彼らが文武両道を実行する学年のリーダーであったこと、折口自身が共感する感性を備えていたことを知ることができるのではないかと思う。なお、「会員住所及姓名」の項によると、明治四十五年度に折口は四年二組の担任に持ち上がるが、学級の生徒は入れ替えがあり、四年一組に斧原雄三、梶喜一、鈴木金太郎、萩原雄祐、四年二組に上道清一、江口芳輔、

滝山徳三、竹原光造、四年三組に伊勢清志、後藤一雄、柳延胤らが配属になった。⁽²⁰⁾

続いて第五期生の記事についてまとめておきたい。第五期生は折口が大正二年度より国語の授業を一年間担当した学年である。牛島軍平の回想によると、国語担当であった向井宗重郎が女学校に転勤することになったためであるという。各学期の項における「学校日誌」によると、明治四十四年度の二年一組の級長は山中直一、二年二組の級長は長谷川輝雄、二年三組の級長は鈴木喜三郎（いずれも通年）であり、彼らは全員年度末に優等褒状受賞、特待生となった。このうち、鈴木喜三郎は二学年の秋季修学旅行（大和多武峰方面）の旅行記を、生徒代表として執筆している。また、「第三学期」の項にある、「一、四十四年度学事報告」のうち、「生徒異動」において、「十二月一日 伊原宇三郎徳島県立徳島中学校より第二学年に転入許可」と見える。伊原は年度末に優等褒状を受賞している。⁽²¹⁾

五 「第二三学年聯合談話会」記事の検討

今宮中学校の『校友会報』は、編集の中心が校内記録という点に置かれており、他校の『校友会誌』に見られるような特定

の生徒や教員の論説や詩、短歌などの創作発表の場としては位置付けられていない。原稿も各学年の代表生徒が執筆しているが、事実を客観的に記録しているものが多く、個性的な内容のものとは認められない。これは第二節で紹介した会報の編集方針によるものであり、恐らく生徒の文章には編集担当教員の指導が入っている可能性が高い。その中において、文章表現の上で異彩を放っている記事がある。校友会の文芸部が主催して十一月十六日より十八日にかけて校内で実施された学年別の談話会のうち、「第二三学年聯合談話会」の記事である。⁽²²⁾

談話会とは弁論大会のことであり、今宮中学校では例年全学年合同で実施されてきたが、「従来談話会の弊は初年級は上級生の談話を以て難解とし、上級生は下級生の談話を以て平凡となして自己の思想を全聴者に伝ふるに不都合を生ぜしことなり」との理由により、明治四十四年度より、一学年（十六日）、二・三学年（十七日）、四・五学年（十八日）というかたちに改めて実施された。記録者は例によって各学年代表生徒であり、記録のフォームとしては、タイトル・学級・生徒氏名（君付け）・要旨と講評となっている。やや長文であるが全文を引用してみたい。なお、生徒氏名の「○○ ○○」の伏字は筆者による。

第二三学年聯合談話会

弥生の空にも優りて神の工夫をこらしたりと覚ゆる霜月七日

第一回第二、三学年聯合談話会は我講堂にて開かれぬ

一、開会の辞山本先生より談話会の目的並びに新たに生れたる聯合談話会の趣旨を以つて開会の辞とせる

二、菊の話

二ノ三 鈴木 喜三郎

百花悉く調落して天地漸く黄ばみて色あせむとする内に独り
黄菊白菊はしなやかに且つ操正しく園庭を飾る其の高潔なる
人をして襟を正さしめ徳を磨かしむさればにや畏しくも我
皇室の 御紋章とはせる 然かれ共かゝる菊の園も一朝一夕
の造りにはあらず

評 凡そ人明日ありて思ふ心に欺かれて夜半に嵐の吹かぬ

ものかはをさとらざる人果して幾何かある君の説には
一度接せばかゝる輩はつき失せむ

三、鏡の手妻

三ノ二 柳 延滝

感情の発表は駿馬の奔逸するが如し、一度怒気激発すればま
さに其の赴く所を知らず人!!時にあたりては直ちに鏡を思ひ
浮べよ而して鏡の前に立ちて自身を自我より見おろせよかく
ては我顔の醜には且つは驚き且つは恥づべく従つて怒気はい

つしか鏡の手妻にあざむかれて何れにかかくれむ

四、依頼心を去れ

二ノ三 〇〇〇〇

一時の失敗は我為なり成功は最期にありと説き只其の失敗あ
まり人に依らむとするは世の党那れ共夢かゝる根根持つべか
らず男子は只管自己の真正なる能力によつて以つて成功を期
すべし

評 態度恥かしからずと雖も言語也滞りたりと云はざるを

得ず書きをはりあやまりて一点の滴落ちたるが如し

五、松平定信の身体鍛錬

三ノ一 鈴木 金太郎

彼の松平定信公は幼少多病然れ共人知らぬ鍛錬はやがてかゝ
る英雄の士台を築き身体を象の如くし意志を獅子の如くせり
公の早世づかひたる人々は先立ちて公は七十の阪を超えて後
れて帰られぬ旅路に赴けり

翁古人に倣ひて五十の躉を朝日は東に夕には西に移しぬと次
に学生たるもの、鍛錬の必要なることを話されたり

評 容姿雅語調和かくて前回の談と会に対し十分会稽の恥
を雪きたるぞうれしき

六、親心

二ノ三 山中 直一

三子をもつ人の飢渴に迫りてすらも一子を豪家に託するを拒

みたりとの例を引き誠に子思ふ親心はさもあるべく然れ共世人稍もすれば云ふ「親の心を知らず」と

これ誰の言ぞ而してこれ誰の罪ぞと話され つづいて孝の重んずべきを説かる

評 孝と題する談話はさすがに聞く毎に鬼に懲らさる如き感身に迫る殊に君の流るゝ如き口振し用意周到なる意義には人をして寒からしめたり

七、注意力の修養

三ノ一 〇〇 〇〇

注意力には無意注意と有意注意とあり「巧妙なる精神の働きは身体の健全に關すること大なり」等時々さはがしきひまより聞こゆ

評 聴者飽きたるにや騒がしく全く聞くに能はず

二ノ三 天野 勝平

八、^(肥料)廢物利用
「褐も三年たてば用に立つ」とは材木の屑は薪となり薪は炭となり炭は肥料となると云ふな廢万物皆此の如し…云々この点に注意して苟も有用なるものは一物たりとも棄つる勿れと述べらる

評 誠に然り一塵も有用なるものを棄てざるは蓋し^(蓋)勤儉の徳なり

九、楠公と孔明

三ノ一 三橋 隆一

空しく富を積むを以つて成功者となさば楠公孔明は共に失敗者に数へざるべからざるに聖人と尊ばれ神として仰がるはそも何の故ぞやこれ全く絶^(絶)耐的なる人格の価値によらずんばあらず蓋し人の肉体は何時しか破滅して雲散霧消して復痕を留めずと雖も人格はこれがために毫も影響せらるゝ、事なし

未来永遠に存続して窮りなきものなり

楠公が尊氏の矢に斃れ孔明が魏の戦ひの陣中に失せたりと雖も其人格はいやましに榮えに榮ゆるを覚ゆ嗚呼諸君よ人格ありてこそ学生たるものゝ資格もあれ

願はくば第二の楠公と孔明を近き将来にあげよ
評 君の論旨誠に芳しく加ふるに意氣軒昂態度沈着人をして息を止めしめたり蓋し^(蓋)本会の自眉

十、人となる法

二ノ一 〇〇 〇〇

蓋し少なき人は君子なり……云々
多くの人の中に頭角をあらはすは難し……云々
評 他国の方言多志時に滑稽に聞えたる語句^(句)少なからず即ち騒ぎどよめきて折々一部幽かに漏れ聞きたるのみ
君早く大阪の色に染み次会にはい大に振はれんことこそ望ましけれ

十一、英語唱歌

二ノ一 菊田 慶太郎

評 宏大なる神聖なる講堂ことに衆人の眼前に於て音声劉亮に歌はる賞すべし〜

二ノ二 小松原 誠三
二ノ三 赤松 元道

十二、革命
太古漁獵の時代より今日文明の世に、至るまで日本及び支那の国体の異点を述べ立てられ次に話さる事左の如し
故に清国に革命ありとも我国には見る能はず我国に改革ありとも支那はなし難し

三ノ二 〇〇 〇〇

今支那に於ける滿漢兩人強の争は人強的争鬪なるを以て事態容易ならず滿斃れは漢は興り漢敗れては滿依然として漢を壓するならん事局もとより期し難し……云々「語調を改めて」次に我国の民の幸を述べらし我国を富士が根の安きに置くべき様述べらん

評 時節柄にもあり且つは元氣極めて旺盛にして深く感ぜしめたりされ共元氣過激といはざるを得ず玉に疵あるが如し

十三、面白き人となれ

騒がしくして聞こえず遺憾なり

十四、所感(感)

三ノ三 〇〇 〇〇

1 我国は一躍四十年にして世界の覇者となりしは何の故ぞ

大和魂即ち強健不屈なる心身によらざることを得ず

凡そ現時の学生には運動を全廢していたづらに勉め空しく頭をのみ大きくするに過ぎざるものありこはいはづも

誤なり英雄はいたづらに頭に物を押しこむにあらず鍛錬しつ、おもむろに勉むるものぞよし

2 世にハイムラーあり厭ふべき事五月蠅の如し近よる人もなきものなり

3 我国の前途の運命は我々第二の国民の掌中にあり乃ち各自々重して奮励努力せよ

評 君の意氣旺盛なるには即ち忽ちにして頭大なる連中は逃げ失せむ然れ共用意稍周到を欠ぐ遺憾の極みなり

十五、閉会の辞

山本先生より本日の談話の残の外によりかりしことを賞せらる芽出度采手と共に閉会す(第三学年江口芳輔記)

この前後には第一学年談話会と第四五学年聯合談話会の記事があるが、これらと比較すると、まず生徒氏名に「君」の表記がない。要旨と講評が区別されていて評価も明瞭であり、六、九、十一のような高い評価から七、十、十三のような評価の対象

がない。要旨と講評が区別されていて評価も明瞭であり、六、九、十一のような高い評価から七、十、十三のような評価の対象

外まで、極めて簡潔にまとめられている。また古語がちりばめられ、句読点がほとんど使われない独特な文章表現が用いられており、一の講評に親鸞の桜の和歌をアレンジして引用するなど洗練されている。記録者は「江口芳輔」となっているが、講評の視点や要旨の表現などより見ても、中学生が同級生や下級生に対して書く文章とは思えない。江口は九月二十四日に実施された弔魂式において第四期生総代として弔辞を述べているが、その表現とは大きく異なっている⁽³³⁾。

結論を先に言うのと、私はこの記事を書いたのは折口なのではないかと考えている。十一月十七日は着任の四日前に当たるが、校友会文芸部の最大の行事である談話会に前任の山上与平とともに出席していた可能性が高い。山上は三年二組の担任として代表生徒の弁論の指導を担当しただけでなく、文芸部理事・会報係兼揭示係として、当時校内で改革が進められていた談話会を会報にどのように記事にすべきかを、後任の折口に引き継ぐ必要があったはずである。「山上理事は会報に揭示に、熱心事に当られしが、事情の止むを得ざるありて佐原中学に転じられたり。」と見えるように、山上は会報編集の中心的存在であった。のち折口は、敢えて第二三学年の記事を自ら執筆することによって、今回初めて連合談話会のかたちとなった趣旨を踏まえ

て、それまでの内容と評価が曖昧なままであった会報の記事を、より明瞭にしようとしたのではないだろうか。弁論において重要なことが何であるのかを生徒自身が反省できる記事にするところが、次年度への改善につながるはずである。しかし、会報は生徒の名前で記事を出すことが原則であったため、ここでは第四期生の代表生徒として江口の名を借りたか、あるいは江口に口述筆記させたのではないかと考えるのである⁽³⁶⁾。

もうひとつ興味深いことは、この第四期生と第五期生合同の談話会の記事において高い評価を受けている生徒に、二（鈴木喜三郎）、三（柳延胤）、五（鈴木金太郎）、六（山中直一）、が含まれていることである。彼らは卒業後も折口と関わりを持ち続ける教え子となっている⁽³⁷⁾。

結

『折口信夫全集』第三十一巻に所収されている「著述総目録」によると、今宮中学校の教員であった明治四十四年と翌四十五年（大正元年）はほぼ空白となっている。大正二年より宮武外骨主宰の『不二新聞』に「迢空沙弥」の名で短歌を発表、柳田国男が創刊した『郷土研究』に「三郷巷談」を発表するなど活

躍が始まるが、この空白期の折口の活動については、「自撰年譜」や「年譜」、教え子の回想より断片的に知られるのみである。

本稿は新出の『校友会報』第六号という学校資料より、明治四十四年の今宮中学校の校内状況と、新任教員としての折口の姿を復元しようと試みたものである。その結果、折口は明治四十四年十一月二十一日に同校に着任し、前任の山上与平より三年二組学級担任と校友会文芸部理事會係兼揭示係を引き継いだこと、『校友会報』の編集担当者として、生徒の名で「第二三学年聯合談話会」の記事を執筆したことを指摘することができたと思う。また、折口に影響を受けていく教え子や親交があった同僚教員の校内での動向についても、新たな一面を紹介することができたと思う。

全国の旧制中等諸学校では、明治・大正期より校内で『校友会誌』（『校友会誌』）が発行されて、学校行事の記録と教職員、生徒の論説、創作活動の発表の場となっていく。^⑧折口自身も大阪府第五中学校（後、大阪府立天王寺中学校に改称）に在学中、同校の校友会誌「桃陰」に「都賀野の牡鹿」、「八栗の秋」、「紀和地方修学旅行記」を発表している。^⑨とりわけ修学旅行記はとも個性的な文章で、早熟かつ独特な感性を窺うことができる。これに対し、今宮中学校の『校友会誌』は校内記録としての性

格が編集方針に強く打ち出されたものであり、「第二三学年聯合談話会」の記事の作者が折口であったとしても、それは個人的な思想や心情を表現した「作品」ではなく、あくまで校内分掌における職務上の記録に過ぎない。改革の途上にあつた文芸部主催の談話会を、より良いものにしていくための教育活動の一環として、まとめたものであると理解すべきであろう。

明治四十四年と翌四十五年（大正元年）における著述の空白は、折口が最も純粹に、多忙な教育活動に打ち込んでいたことを示していると思われる。今回紹介した『校友会報』第六号は、非凡な才能を持ちながらも、一人の中学校教員として自らの職務に従事する折口の姿を知ることができる貴重な資料であると言える。のちの民俗学者・国文学者・歌人である折口信夫の「前史」への理解の一助となれば幸いである。

註

① 大阪府立今宮高等学校の学校史は、榎本了一編『今宮中学校創立三十年史』大阪府立今宮中学校 一九三六年（以下「創立三十年史」と略す）が最も古い。のち『大阪府立今宮高等学校創立七十周年記念誌 いまみや なのは文化と今宮』今宮高校記念誌編集委員会 一九七六年（以下『七十周年記念誌』と略す）、『創立八十周年記念誌』大阪府

立今宮高等学校創立80周年記念事業委員会 一九八六年、『創立九十周年記念誌』大阪府立今宮高等学校創立90周年記念事業委員会 一九九六年、『今宮史記100年の歩み』大阪府立今宮高等学校創立100周年記念誌部会 二〇〇八年(以下『今宮史記』と略す)など十一年(こ)に記念誌が編纂されている。

(2) 『創立三十年史』は初代校長瀬川彦四郎より第四代校長長坂五郎までの事績が詳細にまとめられており、¹⁾に瀬川が定めた教育課程上の特色についての記述がある。開校以来、正課以外に課外時間を設け、低学年では体育(修身)と図画を各一時間、高学年では外国語(英語)と数学を各一〜二時間、四・五学年では理化学と博物科の実験、さらに明治四十五年以降は三学年以下に一〜二時間の自学自習の時間を加えて、一週間の時間を正課と課外を合わせて三十四時間としたという。各五箇条よりなる生徒心得綱領と生徒禁止要目も定められ²⁾、³⁾学力養成と生活の規律を重視した校風であったことが分かる。p.128-142・p.181-206・p.277-280)に大正十年度、昭和十年度の進路実績が掲載されており、旧制高等学校に例年三〇名〜五〇名が進学している。

(3) 折口信夫の今宮中学校での教え子については様々な著書の中で触れられているが、ここでは一般的な知識として、有山大五・石内徹・馬渡憲三郎・迢空・折口信夫事典、勉誠出版 二〇〇〇年の「Ⅲ 折口信夫の周辺」を参照した。

(4) いずれも折口博士記念古代研究所編『折口信夫全集』第三十一巻 日記・書簡附年譜 一九七六年所収(以下『全集』三十一巻と略す)。なお「年譜」は「あとがき」に記載されているように、複数の年譜をもとに関係者からの聞き取りを編集したものである。

(5) 教え子の回想については、萩原雄祐「折口先生の面影」、伊原宇三郎「昌平館時代の折口先生」(以上『三田文学』四十三巻九号 一九五四年

一月)、鈴木金太郎「誠意ある愛情」、萩原雄祐「釈迢空先生を憶う」、伊原宇三郎「師の愛神に等し」、山中直一「砂けぶり」、牛島軍平「先生」、下村喜三郎「詫びごと」(以上『短歌』創刊号 一九五四年一月)、牛島軍平「折口信夫の世界(21)」「芸能」二十巻九号(28号)一九七八年九月)、同「今宮中学校教員時代の折口信夫」(『芸能』三十巻八号(36号)一九八八年八月)などがある。その他、前掲誌(1)『七十周年記念誌』にも第四期生・第五期生の回想記が掲載されている。

(6) 現所蔵者は古書店で購入したという。伝存の由来については不明であるが、裏表紙に「PUSH」というサインが残されており、元の所蔵者である可能性が高い。「会員住所及姓名」の欄に掲載されている、教職員・在校生・卒業生の氏名と照合すると、明治四十五年度に会計庶務係・書記を務めていた職員に、「山口勇次」という人物が確認できる。あるいはこの人物が所有していたものであるのかも知れない。なお、「第三学期」の項にある、「一、四十四年度学事報告」の「生徒異動」における新入生(第一学年)氏名一覧(p.75・76)に、何かをチェックしたような多数の書き込みがある。図版1は所蔵者の許可を得て筆者が撮影した。

(7) 「明治四十四年度職員」の集合写真には、折口と石丸梧平、及び前掲註(6)の山口勇次の姿が確認できる。最後に複数名の教員の顔写真が合成されている。図版2は所蔵者の許可を得て筆者が撮影した。

(8) 「作業」は、今宮中学校において、「勤労の習慣と公共心養成との目的を持つて」開校以来実施されてきた教育活動の一つである。もとは校庭の清掃が中心であったが、明治四十四年度はこれを拡張して、農作物(大豆・甘藷・水菜・キャベツ・油菜等)の栽培を企画したという。将来は草花を栽培して校庭を飾る予定であるという。『校友会報』第六号 p.136・137)

(9) 明治四十四年度の春季修学旅行は、一学年〜三学年は五月五日、四学

- 年は五月二日～四日、五学年は五月一日～五月五日の日程で実施され、行先は一学年は甲山方面、二学年は男山・天王山方面、三学年は六甲山方面、四学年は但馬丹後地方、五学年は中国四国地方であった。秋季修学旅行は全学年十月二十一日に実施され、行先は一・二学年は大和多武峰方面、三学年は山城高雄方面、四学年は河内金剛山方面、五学年は山城愛宕山方面であった。『創立三十年史』p.28～32に、明治三十九年度～大正九年度の修学旅行についての一覧が掲載されているが、明治四十五年度の四・五学年の春季修学旅行(五月五日～六日)の行先は宇治山田であった。第四期生の生徒とともに、担任の折口も同行した可能性が高い。八月十三日～二十五日の伊勢清志と上道清一との熊野・志摩旅行は春季修学旅行とコースが一部重複することになる。
- (10) 『創立三十年史』p.34～35にも同じ文章の引用があるが、これは明治四十年八月の『校友会報』創刊号に掲載された、瀬川彦四郎会長(校長)の「発刊の辞」の一部である。
- (11) 例えば明治二十九年(一八九六)創立の愛知県立第二中学校の校友会などはこの組織となっている。【倉橋真司「愛知県立第二中学校『校友会報』第二十四号(大正五年三月)について」(愛知県公文書館研究紀要)創刊号 二〇一三年】
- (12) 『校友会報』第六号における「本会記事」以降の項は、各部担当の理事がまとめた内容となっている。「庶務部」の記事より、校友会は会員が納入する会費と共同購買部からの補助金によって運営されていたことが分かる。共同購買部は教科書や学用品、運動用品を販売し、その収益を本部資金と校友会費補助として分配した(p.131～136)。
- (13) 『全集』三十一巻 p.362、369
例えば岡野弘彦編『新潮日本文学アルバム 折口信夫』(新潮社一九八五年)の略年譜(p.105)では「十月」、岡野弘彦編『精選 折口信夫 VIアルバム』(慶應義塾大学出版会 二〇一九年)の略年譜(p.202)では「十一月」となっている。
- (14) 『全集』三十一巻 p.362、369
例えば岡野弘彦編『新潮日本文学アルバム 折口信夫』(新潮社一九八五年)の略年譜(p.105)では「十月」、岡野弘彦編『精選 折口信夫 VIアルバム』(慶應義塾大学出版会 二〇一九年)の略年譜(p.202)では「十一月」となっている。
- (15) 牛島軍平の回想の中に、「先生が、大阪府立今宮中学校に赴任されたのは、私ども五期生の二年生の二学期のはじめ、明治四十四年九月のことだった。四期生の国語の受持ちだった山上与平という先生(明治四十年国学院の師範部出身、先生天王寺中学の同期の岩橋小弥太さんと同期)が病気で休職になられ、その代わりに嘱託講師としての赴任だった」【前掲註(5)】『折口信夫の世界(21)』とある。ただし『校友会報』第六号では、山上の病気休職は確認できない。
- (16) 『校友会報』第六号の「本会記事」の項に、「十一月二十一日山上理事去りて折口理事これに代わりかくて年度末に至れり」と見える(p.283)。
- (17) 『院友名簿』(昭和十六年二月)には、明治四十年卒業(第十五期)の師範部国語漢文科に山上与平の名を確認することができる。出身地は「大阪」とあるが、この時すでに故人となっている。岩橋小弥太は「國學院大學學報」六十六号(一九六三年七月)に「遠い明治の思い出」という文章を寄稿しているが、その中に「同級に山上与平君が居って首席で卒業したが、同君とは在学中から又生涯を通じて親しく交際した。私が大正の終に始めて本学の教壇に立った時、同君は本学の教務課長をして居ってまた顔を合わせ、暫くして病氣をして郷里に帰った」と見える。『國學院雜誌』第五卷四号(一九〇九年四月)の「國學院大學近況」における「院友異動」の記事の中に、「第十五期」山上与平氏大阪府立今宮中学校嘱託」と見えることから(p.96)、山上が今宮中学校に着任したのは明治四十二年四月であったことが分かる。
- (18) 折口親夫(一八九四年生～一九四八年没)と和夫(一八九四年生～一九六二年没)は信夫の七歳下の双子の弟であるが、母親をめぐる話題に比べて二人が今宮中学校の第二期生であることは一般にはあまり知られていない。【前掲註(1)】の『今宮史記』所収の寺本義男「恩師

の思い出 国語科 折口信夫」の中で語られている。なお、『校友会報』第六号の「会員住所及姓名」の項のうち、職員の名は住所、処務分掌、受持学科、職名、姓名の順で記載されているが、折口の処務分掌以下の記載は、「四学年二組担任 修、國、漢、囑託教員 折口信夫」となっている。学級担任は修身の授業を持つことになっていた。

(19) 古子進(一八八五年生—一九四六年没)は信夫の三兄に当たる人物で、明治四十三年に古子家の養子となった。幼少期の信夫に多大な影響を与え、のち経済的な支援をした人物として著名である。

(20) 「自撰年譜」(『全集』三十一卷p.38)によると、大正元年十一月に「北郊蛭ヶ池に下宿」とあり、この時に「古子方」より転居したと考えられる。

(21) 石丸梧平(一八八六年生—一九六九)は、大阪府に生まれ、早稲田大学卒業後、今宮中学校に勤め、折口と親交を結んだことで知られる。大正四年に退職し、上京後は「人生創造社」を創立して『人間親鸞』などの多くの著書を刊行した。「年譜」(『全集』三十一卷p.38)において、石丸が今宮中学校に着任した年の記載に誤りが生じた理由は、石丸自身の次の回想が原因であると思われる。「私どもは、大阪府立今宮中学校の教師であった、私はその前年に赴任して来たのだが、親しい仲間がなく、ぼつんと一人であつた。淋しい一年が過ぎたが、その初秋に折口君が来たのである。」「人間・釈道至一四十年の人生雜記」(『短歌』創刊号 一九五四年一月)

(22) 『校友会報』第六号の「会員住所及姓名」の項に旧職員として北川虎三郎の名が確認でき、「府立江戸堀高等女学校に勤む」と記載されている。

(23) 『校友会報』第六号の「会員住所及姓名」の項によると、「豊能、熊野田村五〇 生徒監督教務係 作業施行係 歴 唱 同(教諭) 石丸五平」とあり、明治四十五年八月における住所は豊能郡熊野田村(現豊中市)である。受持学科の「唱」とは音楽であつた。「折口君と一

緒にあつた三年間は、大阪生活に於ける最も楽しい時代であつた。文学好きの少年を五六人も引きつれて一緒に郊外をあるいたこともあるし、また、折口君は、これ等の生徒を伴れて私の田舎の家(今の豊中市)に度々遊びに来たこともある。」「前掲註(21)「人間・釈道至一四十年の人生雜記」

(24) 『校友会報』第六号p.83(「会合」の項)、なお乱丁があり、p.80の次頁よりp.83に戻る。

(25) 「創立三十年史」によると、「級長は各級担任が推薦せし者を校長任命し、列長は生徒の公選によつた」(p.8)という。

(26) 『校友会報』第六号p.6(「第一期」の項)、p.67(「第三期」の項)、p.71(「一、四十四年度学事報告」の項)、p.111(「剣道部」の項)、p.138(「遊戯部」の項)

(27) 『校友会報』第六号の「第二期」の項に、各学年の秋季修学旅行の記事(p.48~60)があるが、途中乱丁があり、p.48の後ろにp.33~38が挿入されてしまつている。上道の記事はp.53~55にある。

(28) 「自歌自誌 海やまのあひだ 奥熊野」(『折口信夫全集』二十六巻歌論歌話篇2所収p.35)

(29) 『校友会報』第六号p.15~159(「会員住所及姓名」の項)

(30) 前掲註(5) 牛島軍平「今宮中学校教員時代の折口信夫」

(31) 『校友会報』第六号p.6(「第一期」の項)、p.71・79(「一、四十四年度学事報告」の項)

(32) 『校友会報』第六号p.83~86(「会合」の項)

(33) 「親鸞聖人絵詞伝」に見える、「明日ありと思ふ心の仇桜夜半に嵐の吹かぬものは」の和歌が一部改変されて引用されている。

(34) 弔魂式は故人となった教職員、生徒、卒業生の慰霊を行う校友会の行事で、秋季皇霊祭に合わせて実施された。明治四十四年度は九月二十四日に実施され、校友会会長(校長)に続いて、会員弔辞として故

人の同期生(第一期生・第二期生・第四期生)の代表者が弔辞を述べている(『校友会報』第六号p.46~47)。なお、江口芳輔は折口自身や同期の教え子の回想の中で話題になることはない人物であるが、三年時は折口の学級で級長を務め、かつ学年では萩原雄祐と首席を競って特待生に選ばれている。四年時にも折口の学級であった。『一橋大学学制史資料』第六巻所収の(東京高等商業学校)「大正九年専攻部卒業論文題名及氏名」の銀行科に江口芳輔の名が見える。

(35) 『校友会報』第六号p.83(「文芸部」の項)

折口は短歌に句読点を用いたことで知られるが、初期の文章は原本で確認すると句読点を用いていないものがあることが確認できる。例えば明治四十三年の卒業論文「言語情調論」は複数の人物によって口述筆記されたものであるが、句読点が一切用いられていない。【國學院大學図書館デジタルライブラリー 折口信夫「言語情調論」2023.11.4 閲覧<https://opac.kokugakuninac.jp/digital/diglib/Orikuchi01s/magel/pages/page001.html>】

(37)

もし「第三三年聯合談話会」に折口が出席していたとしたら、これが鈴木金太郎との最初の出会いということになる。講評に見える、「前回の談」とは、五月二十五日に開催された「楠公精忠記念会兼談話会」のことで、この時鈴木は石丸の講演に続いて、「義貞鎌倉攻」と題する弁論を行ったが、「声苦しげなりしを以て中止す」という事態となっていた(『校友会報』第六号p.84(「会合」の項)。なお、最初の「菊の話」の弁士を務めた鈴木(下村)喜三郎は鈴木金太郎の弟である。

(38)

例えば、石川啄木や芥川龍之介、萩原朔太郎らの中学校時代の習作が『校友会雑誌』に発表されていることはよく知られている。【斉藤利彦「近代日本の学校文化と文芸活動―『校友会雑誌』という磁場」(『学校文化の史的探究―中等諸学校の『校友会雑誌』を手がかりとして)』東京大学出版会 二〇一五年所収。p.233~254]

(39) 『折口信夫全集』三十巻 雑纂篇2所収p.3~10